農村協同体化論 三

手塚信吉

近代農業は高度の技術と科学智識を必要とする。農薬の取扱い一ツ考えても、零細個人農家などに無統制で食料生産を任せられる時代ではない。土壌の汚染度がアメリカの二十倍と云われている。うっかり母乳も飲ませられない現状は非常事態宣言に価する。国民の信頼をつなぐためにも一村協同体化農業に移行すべきである。

一、民族の滅亡につながる農薬の被害

PCB（ポリ塩化ビフェニール）の害毒が急に世間の重大問題化してきた。専門書をみるとDDTに似た構造の有機塩素剤であり、耐熱、耐薬性などにも優れており、コンデンサー、トランス、パネルヒーターの絶縁油、ペンキ、インク等々にも広く使用されて、一般家庭にまで汚染度がひろまっている。

PCBはもともと自然界には無かった物質であって、化学的に人間がつくり出したものであるが、体内に吸収されると殆んど外に排出されずに脂肪内に蓄積されて、皮膚や肝臓に障害を起す。妊婦の体内に入ると胎盤を経て胎児の肌を黒くかえ死産に至ることもある。

こんな恐るべき有毒物質が、すでに二十余年も前から、その特性を利用してあらゆる分野に盛んに使用されており、魚介類、鳥獣肉類、感圧紙、チリ紙、トイレットペーパー、水道水、母乳からまでも検出されるまで広く汚染されている。一昨年関西から九州方面まで大騒ぎとなったカネミ米糠油事件のような急性中毒患者の続出は、不幸なことではあるが反って始末が仕易い点もあるが、知らず知らずの間に国民全体の体内に蓄積されて行くことは、民族子孫の絶滅にもつながる問題であって、一日の放任も許さないものがある。そのPCBが、農薬に混入されたり、農機器に使用されたり、家電部品に使われたりして農産物が汚染されつつあることは重大な問題であるが、更に一層恐ろしいのは、各種農薬の害毒である。

農薬の歴史を調べてみると、我国では寛文十年にウンカの駆除に鯨油を用いた記録があり、ヨーロッパでは一六九〇年にタバコを害虫駆除に用いた記録があるなど、農薬はかなり古くから用いられていたらしいが、その効果をはっきり認めて用いたのは、日本では大正時代になってからである。最初は石油乳剤、ボルドー液、除虫菊剤、石灰硫黄合剤などが、農家の自家調製によって使用されていた。

大正七年貯蔵米の害虫コクゾームシなどの駆除にクロルピクソンの特効が確認され、仝十年にその製造が国産化された。これが我国における農薬工業のはじまりである。仝十二年ころは硫酸ニコチンが輸入され、マシン油乳剤が農家の自家生産でつくられ、また砒酸鉛の製造が国産化された。昭和のはじめには殺虫剤として除虫菊剤が生産増大となり、砒酸鉛や砒酸石灰の生産が増大する一方、殺虫剤としてボルドー液のほか炭酸銅や塩比鉛などの銅剤が市販されはじめた。

昭和九年になると、有機水銀剤ウスブルンが輸入され、その後は種子消毒剤として広く利用された。昭和十五年以後は農薬も配給統制を受け、第二次世界大戦開始とともに外国との交通も絶えて農薬の進歩もとまった。従って戦前の農薬は殺虫剤と殺菌剤の二種類だけであり、また防除の対象も果樹や野菜の病害虫であり、イネの最大の病害虫である、イモチ病やメイガなどに対しては適切な防除薬が得られなかった。

農薬を使用面から分類すると殺菌剤、殺虫剤、殺鼠剤、除草剤、植物生長調制剤、補助剤などにわかれ、さらに殺菌剤は散布用殺菌剤に種子消毒剤、土壌消毒剤などに、殺虫剤は毒剤（消化中毒剤）、接触剤（直接接触剤）、（残効性接触剤）、薫蒸剤、浸透殺虫剤（全身殺虫剤）忌避剤、誘引剤、補助剤は展着剤、増量剤、協力剤に分かれる。

欧米各国では一九三〇年ごろから農薬の基礎研究が進み、無機および天然物の農薬にかわって、有機合成農薬の時代となった。即ち一九三九年にはスイスで有機塩素系殺虫剤であるDDTが発明され、次いで一九四二年にはイギリスでBHCが発見された。大戦中にドイツで毒ガスの研究から多くの有機燐化合物が合成され、それが戦後にテップ、パラチオンなどとして農薬に使われるようになった。

戦争中立遅れていた我国の有機化学工業も、戦後ようやく諸外国の技術を導入してめざましい発展をとげ、新しい農薬も次々に出現させた。その最も大きな成果は、稲作の病虫害防除の進歩であるが、そのきっかけとなったのはアメリカ軍が防疫用として使用したDDTであった。これを農薬として使ったのは昭和二十二年からであった。

それまで日本の農家ではサンカメイガを防除するために、稲の刈り株を焼きはらって幼虫を駆除したり、種蒔き時期や田植え期をおくらせたり、そんな消極策しか方法がなかった。DDTの使用によって、始めて農薬による防除法が確立したのである。次いで稲作最大の害虫ニカメイガの防除が昭和三十六年にBHC、同三十七年にパラチオンの出現によって一挙に解決された。即ちニカメイガが発生期に関係なく早期田植えが可能となり稲作の安定に計り知れない利益があった。

イモチ病の防除は、従来ボルドー液や銅剤銅水銀剤が使われていたが、二十七年になって有機水銀剤の効果が確かめられ、農林省の奨励もあって一般に普及し、このイモチ病防除は、パラチオンによるニカメイガ防除と相まって稲作技術の急発展を示した。

一方、畑作についても、三十四年ごろから土壌病虫害、とくに土壌線虫の防除にDID、EDB、DCPなどの農薬が使われるよう

になりその効果は著しいものがあった。また除草剤の発展も目覚しいものがある。その除草剤の発展は農家の除草労働を五分ノ一以下に節約することができた。

第二次世界大戦後、農薬の進歩はめざましいものがあり、農業生産の安定化に大きく役立ているが、その一方で農薬として有効度の高いものほど毒性が強く人体、家畜、魚介類等に害があり、中毒事故と共に漸く世間の問題化している。特にパラチオン、シュラーダン、メチルシメントなどは毒性が強いので、特定毒物として取扱いも厳重に規制されているが、農家の不注意から厚生省の調査でも、有機燐剤で発生した中毒事故が年々激増しており新対策を必要とする段階にあるという。パラチオン・PM（パラチオンとマラソンの混合剤）、PB（パラチオンとBHCとの混合剤）、EPNなど中毒事故の発生が著しい。

これ等の農薬事故は直接取扱う農家の災害のみでなく、農耕地の土壌を汚染し農産物からも燐や水銀その他の毒物が検出され、一大恐慌を起している。殊に不完全な設備と無智な散布作業から土壌の汚染度がアメリカの二十倍ともいわれている。すでに鰌も田螺も蝗も全滅化して久しい。厳格に研究をすすめたら、日本の農地は食料生産不適格農地となっているかも知れない。

殺虫殺菌剤にせよ、除草剤にせよ自然界への反逆であり、生物に害毒なものは人体にも有害であり、このまま農薬乱用を続けることは、民族自滅の愚を犯すものであろう。だが農薬のみでなく、あらゆる文化の産物は一度び利用したものを、簡単に中止も廃止も不可能であり、結局はその害毒を最少限度に合理化して行く外はないであろう。

そのためには高度の専門智識と技術を必要とし、三ちゃん農業化した零細個人農家などに使用せしむべきではない。農薬のみでなく肥料にしても施肥と土壌関係にしても、今後はますます、高度の化学智識を必要とする時代、物真似農業にすぎない零細個人農業、殊に三ちゃん農家など農薬取扱を禁ずべきである。

最近の話であるが、リンゴの丸かじりで砒素中毒を起したもの、イチゴを食べて下痢したもの、等々耳にする度毎に国民は警戒心を強めており、散布農薬の附着を恐れて、野菜も果物も敬遠する風潮がある。金儲けのためには人命の犠牲もいとはない資本主義日本の農政の事であるから、無秩序、無統制な個人農家の農薬使用を禁ずことはあるまい。だが一般国民の方では、零細個人農家の非科学的に生産した農産物を敬遠しはじめている。今後調査研究の進むにつれて、PCBの被害と共に農薬の被害が一大政治問題化するであろうがその根本対策としても、一村協同化農業により、科学的にも確立した農業再建が急務である。それにしても利潤追求のためには如何なる犠牲も害毒も恐れない背徳思想が、殆んど普遍化した日本はどうなるであろうか。大石環境庁長官の健闘ぶりに感謝しながらも、その資本主義第一主義の物欲の亡者化した日本の政治も経済も人類の敵となりつつある。

二、農夫症は個人農家の宿命

昭和四十三年一月卅一日の朝日新聞朝刊に「脳卒中に揺ぐ農村」と題して左記のような記事をみて、個人農家の宿命として『月刊キブツ』にも取上げたことがある。だがこんな文化国家にあるまじき

悲惨事が、今もなお寸分も改まってはいない。その無神経さに少々驚かされるが、人命よりも人権よりも、農民の利己心だけを満足させようとする政治、ここにも救い難い昭和元禄日本の姿が浮彫りにされている。記事そのまま書いてみると

脳卒中に揺ぐ農村

農民病といわれる脳卒中という古い病気が今も新しい重荷となって農村を暗くしている。深刻な人手不足で、かあちゃん農業に追いまくられている農家の主婦たちが、さらに脳卒中の後遺症である中風で寝っきりの舅や姑の看病に疲れ切っている。

病人たちも身心ともに病苦にさいなまれて、明けても暮れても、早く死にたい死にたいと泣きくらしている。この農村の中風患者と嫁女の苦しみを、昨日農協会館で開催された第九回農民の健康会議でも深刻に訴えられていた。その報告者の一人が眼をうるませて云う。

中気患者の姑に看病する嫁が泣き泣きいう。「おばあちゃん、もう少し我慢してね。私がもう倒れそうです。いま私が倒れたらこの家はやって行けないんだから。」

そんな農家の八〇%までが、中風患者の苦しい経験があるという。出稼ぎの留守を守りながら、中風患者になった舅や姑をかかえた主婦たちは、皆ダウン寸前に陥っている状態です。そして悲惨きわまる生地獄の中にある患者たち。暗い納戸か蚕室のすみにねかされて、ハエにたかられ蚊に喰われ、病臭プンプンの中に放置された半身不随のあわれな姿は、とてもこれが人の世とは思われない悲惨事である。最初はそれほど重症患者でなかったものも半身不随のまま放置されるので、次第に動けなくなって終う。忙しく立ち働く嫁女の手をわずらわせたくないので、飲みたい水も飲まず、出たい用便も我慢する。三度の食事も遠慮して、ただ死を待つばかりの老農夫たち。これがかつては村でも評判の勤勉家であり律義者の老後の姿なのである。

厚生省の統計によると、脳卒中死亡者が人口十万人につき、年百八十人で総死亡数の四分ノ一、死因の第一位、人口比でも世界第一位、そして農民が一般人の五倍以上という。

毎年全国で三十万人が発病して、その半数は死亡して生残った半数は中風患者となって、短かくて数年、長いのは十数年間も苦しむのである。そんな中風患者が全国に五十万人もあり、その大半が農村にあるというのだから大問題である。

以上は朝日新聞の記事そのままであるが、農夫症は脳卒中だけではない。不規則な重労働、不自然な中腰作業、寒冷な水中労働、栄養を無視した過食、それらが遠因となり近因となり、合併症となって、消化器障害、呼吸器障害、神経痛、リューマチス等々農村特有の病魔に加えて、近頃は農薬中毒がめっきり増加している。それ等も軽症のうちに治療すれば全快もするが、個人農家にヒマ無し、医者無し、金も無しで、つい手遅れになって重症患者となる。いくら後悔しても一巻の終り。

農薬の毒性一ツ考えただけでも、非科学的で勉強不足で、半可通に終る零細個人農家などに、自由使用も取扱いも許すべきではなかった。こんなところにも人命軽視の悪習が表われている。その他の諸々な農夫症にしても、無自覚、無智、そして目先の私欲で取返し

のつかない悲しみをみる。即ち農夫症とは個人農家症でもある。あらゆる産業が超近代化した時代に日本農業だけが、非料学的な個人農業、それは国民の健康問題からも考え直すべきであろう。

農夫症の原因も、医者が農村に寄付かないのも、日本の農業が零細個人百姓の散在農家だからである。イスラエルのキブツ協同農業のように、一村が協同化して文化生活を営めば、忽ち解決する問題であり、その気になって踏み切れば協同の力で必ずできる。十戸が協同化しても一人や二人が病気になっても支障がない。一村が協同化してキブツを真似たら、農村から病人は半減するであろうし、病人の看護も手厚くできよう。キブツに働く日本青年の一通の書面をみて下さい。

病気なってキブツの有難さを知る

前略、気候のせいか、とうとう病気になり入院治療の身となりました。遠い異国で困ったことになったと心配しておりましたが、病院はキブツ内にあり、医者も看護婦もキブツメンバーであり、肉身も及ばないほど愛情をもった親切さ、そして交々見舞に来てくれるキブツの人々の真心のこもった慰め、本当の人間愛に包まれた幸福感一パイであります。人間が利害関係のない、善意と良心だけで暮せるキブツ協同社会の真価をしみじみ味わいました。キブツの病院は誰が入院しても、一切無料であり平等であり、医者も看護婦も月給取りではありませんから、営利主義の日本の病院などで何ほど大金を払っても、キブツの病院のような真心を買うことはできません。入院して改めてキブツの素晴らしさを知りました。

こんな書面は何通も受け取っておりますが、日本の農業も目先の私欲を捨てて、キブツのような協同体農業に踏み切れば、悲惨な中風患者の憂目をみることも無く、高い文化生活も出来るのである。第一キブツのような協同体社会では、分業が確立しており、一日八時間一週六日間働いて、あとの十六時間は自由の時間、休養も充分取れるし、医師もお抱え農業ですから、予防医学が進んでおり減多に病気もしないのです。

三、商工業の餌食にされる零細個人農業の宿命

徳川幕府三百年の歴史は農民搾取の歴史でもあった。その幕府に代って農民搾取の主人公となったものは、資本主義日本の商工業であり、その頂点に君臨したものが財閥であろう。その財閥に操られていた歴代政府は、その政治政策を商工業中心におき、農村は常に労働供給源にすぎなかった。最も労力搾取に好都合なものは、零細個人農家であり、貧乏人の子沢山で産めよ増せよの温床とされていた。

これは明治以来の日本資本主義発展史をみれば一目瞭然である。世界一を誇る日本の紡績工業大発展のかげには女工哀話にみるような幾百万人の農村生れの少女の犠牲がある。資本主義的侵略戦争に狩り立てられた、徴兵只奉公の犠牲者一千万人といわれているが、その八十%までが零細個人農家の若者であった。石川啄木の「働けど働けどわがくらし楽にならざるじっと手をみる」が資本主義日本の被搾取者農民の宿命でもあった。

勿論これは農民のあまりにも無思慮、無自覚によるものではある

が、そんな農民を喰物にする伝統的な政治政策が今日でも「農業は個人に限る」が農政の基本方針になっており、農民もまた長い習性で零細でも個人農業を望み、無我夢中で欲の二人で働くのが大すきである。だから先の見透しを失った大半の農村青年男女は悉く農村を去っている。もしこのまま成行きまかせで放任すれば、日本の農村は、農産物の生産地としては、二十年を待たずして失格するであろう。

それは日本の独立国としての失格を意味するものであり、どんな犠牲を忍んでも農村再建は必要であるが、今後の農村健全化のために絶対必要なことは、永い因果関係を持つ財閥からも商工業者からも、その搾取の罠を返上させる必要がある。その為にも農村協同体化が絶対に必要なのである。即ち協同体化して強くならなければ永久に救いはないのだ。

キブツとはヘブライ語であって集まりと云う意である。人間は集まるほど強くなり、個人ほど弱いものはない。「農業は個人に限る」と云うのは弱い個人ほど御し易いから個人に限るであって、農民自身まで弱い個人化を選ぶ必要はない。明治政府の農村に産めよ増やせよの多産奨励をやったのも、人的資源政策であって、農民までが自ら好んで同調したことは愚の骨頂であった。

農業のような自然の支配に左右されて生産の不安定な企業は個人企業に最も不利であり、一年の不作にも致命傷を受ける。また生産物を全部原料のまま、商工業者の餌食となるのも個人農業である。その弱点を補足するために生まれたものが、農業協同組合であり形式的には日本は、世界に冠たる農協組織であるが、何よりその組織の中核体である農民そのものに協同協力の思想が芽生てないから駄目なのだ。

資本主義の鬼っ子とでも申すべきか、利潤追求以外の生産活動を知らない。また共同の利益も永遠の為にと理解がない。明年の万金より今年の千金、利を争うこと急な人々の集まりでは、農協本来の機能を果すことは出来ないので、大半が一種の中間搾取機関に終っている。

だから農協はあっても、農村に酪農盛んになれば、乳製品会社が発展し、甜菜栽培が盛んになれば精糖会社が繁昌し、養豚農家が増加すれば、ハム工場の大発展となる。個人農家は常に安価な原料供給者に終っている。偶々農協直営の加工工場が生まれても、非営利形態の事業では非能率化して、反って農民のひんしゅくを買っている。

農業も時代の進歩に伴って近代化合理化経営の必要は当然であり、そのためには協同化による力の結集が絶対必要である。当然農産物の二次加工、消費者との直結等により、中間搾取の排除が必要である。イスラエルに発達したキブツ協同体社会では、この点でも美事な見本を示している。

キブツの真価を知る上で見逃がせない一つであるが、現在イスラエルのキブツでは、地域共同企業として、農産加工工場が全国に七カ所あるという。一九六九年十月第二回キブツ視察の際、始めて見学したのはハイファ市郊外にある、ミルオット工場であった。

この工場は附近二十三キブツの共同企業であり、製綿工場、飼料工場、鶏肉工場、鶏卵処理工場、生果物選果工場、冷凍冷蔵工場、果物缶詰工場等八部門の集合体であるが、その設備の近代化合理化は眼を見張るものがあった。そして当工場の使命は飼料自給、農産

加工保管、価格調節等にあって、特に注目するに価するものは、生産消費の直結が徹底し、生産者価格と消費価格との較差を、いかに接近せしめるかに主眼がおかれ、その最短距離の縮少に懸命の努力がなされていることであり、中間搾取の介在する余地は皆無であることであった。

その結果、生産消費価格を四〇%まで短縮可能となったと云う。日本の農産物をみると、野菜でも果物でも、牛乳でも肉類でも、殆んど何んでも三倍及至五倍という、べらぼうな価格差を平気で国民はあきらめの消費を強いられている。一般資本主義の性格では、安く買って高く売る、そして儲けた奴が成功者と云うことになるが、キブツでは生産物を如何にして安価に消費者の手に渡すかを主眼としている。

ミルオット共同企業は、営利第一主義ではないが、それでも家畜飼料年産十五万トンの生産販売では、年々相当の利益がある。その利益配分法も参考となる。即ち利益の五〇%は社内保留として健全経営の基盤とする。あとの五〇%は販売量に比例して取引先キブツに分配する。

当工場の従業員は七百名であり、内百三十名は各関係キブツからの出向であり、経営、技術、監督業務を分担しているが、キブツ出向者は男女、年令、役職の別なく報酬は同額であり、支払は各キブツ会計係であって、本人達は一切無報酬である。キブツ出身の青年男女の適任者が、年々選考されて数名づつ、専門技術学識を修得するため、大学に入学させる。その数は現に二十六名という。彼等は大学卒業後、五ヵ年間は当工場勤務の義務がある。勿論学費一切工場負担である。

一般従業員は勿論有給であり、労働組合もあり、アラブ人も相当勤務しているが、差別待遇はしないという。賃金要求もあるが、労使直接の対立闘争のないのがイスラエル国の特長である。イスラエル・ヒスタドルート（労働総同盟）はイスラエル独立前、イギリスの委任統治時代から存在し、農民も加えてイスラエル労働者の九五%がこれに参加しており、キブツはその有力な会員である。今日でも国民健康保険業務、労働賃金決定等、政府に代って権限を持っている。

労働組合が賃金値上げとか、待遇改善の要求をする場合、各雇用先でなく、ヒスタドルートに要求する。賃上要求が妥協成らずストライキ騒ぎも皆無ではないが、労使の対立闘争ではないから、大半は穏健に協定が結ばれている。この点、今後の労使関係の在り方で、イスラエル労働総同盟は参考になろう。

ヒスタドルートは歴史的な権威があり、政府に代って、大きな権限を持っており、トヌーバー（農産物販売組合）ハマシュビール・ハメルカズィー（購買協同組合）等も運営しており、名実共に進歩した国家性格の権威機関であるが、そのヒスタドールトの代表的中心人物の大半が、キブツ出身者であることは、注目に価するものがある。

詳細に内容に立ち入って調べたものではないが、或るキブツメンバーの話によると、キブツ出身者は利害に惑わされず、勤勉で嘘がない、そして人間平等観に徹しているから、どんな職場でも忽ち重用される。元々賃金無き労働、私有財産なき生活に慣れたキブツ人は悪意というものがない。社会的信用はそこから生れているらしい。

四、結　論

農業協同化の必要は誰よりも、個人農家が身を以て痛感している。そして今日ではどこの農村でも、部分協業とか、耕作共同とか請負作業とか、種々雑多な変形協同化が年と共に流行化して、その乱雑不統一、不規則化が本格的共同農業を反って困難にしている。

心ある農家は、その不利、不経済、不安定なことも知ってはいるが、あまりにも複雑な農民個々の利害関係が不一致で、近代化も協同化もどうにもならない状態にある。だがこのまま放置すると、次第に行詰って、農家全部が動きが取れなくなる。どこの農村もお先真暗で農業としての農村は全滅街道を突走っている。

明治以来の日本農政の基本方針であった、「農業は個人に限る」と云う誤った指導方策に災いされて日本で農業だけが産業革命の試練を回避し、昔ながらの零細個人農業の保護温存に終始し、当然生ずる甚しい非能率原価高の損失を国民に負担せしめて、それが何か正当性でもあるかの如く錯覚を起して今も尚頻りに政治価格の引上げを要求しているのが今の農民根性である。

日本の農業は経済の原則から云うと、十五年前に破綻している。国家保護政策を廃止して国際農産物価格に任せたら、日本の国内では農産物の生産は皆無となるであろう。そして総輸入食料に依存することにより、その価格は忽ち半値以下になるであろう。これは決して暴論ではない。このままでは十年後には最も悪性な経済現象としてそうならざるを得ないのであろう。

日本の工業労働賃金は一九五〇年ごろはアジアの上位であった。一九六〇年にはイタリアの下位であった。そして一九七〇年には西欧水準に達している。ここまでは設備の近代化、経営の合理化、量産化等でカバーして来たが、それは世界最高の水準に達しており、殆んど限界に達しているから、賃金上昇をカバーする負担力はもう残っていない。

ところが日本の工業労働賃金は、いまアメリカ水準を目指して突進中である。おそらく一九八〇年即ち八年後には工業労働賃金は今の二倍から三倍になるであろうが、合理化も量産化も限界点にある日本の工業界では、激しい労使の力の対決となり、蓄積資本の喰い潰し時代となるであろう。その労使闘争に耐えられない事業は片端から倒産破綻するであろうが、その間にも日本工業立国の牙城を守るためにも、国民の生活を守るためにも、農業政策にメスが要求されるであろう。

それは日本農業の大変革を意味し、時代おくれの零細個人農業の総転業が必要である。この場合日本は、アメリカの大農方式を選ぶか、中国の人民公社方式を選ぶか、その時の政治性格にもよるが、私有農地の大改革が要求されるであろう。今の米価を二分ノ一にするぐらいの経営合理化なら、政治的な強制でなく農民の自覚により、一村協同体化農業でも可能である。子孫の為、日本の為、農村人も真剣に考える時である。政府が何んとかしてくれるだろう、そんな他力本願は百害あるのみ。選挙の得票を気にする政治家は大衆の前には無力に等しいであろう。